

# WIN-WIN の視点に立つ 大学 2 年次キャリア準備プログラムの開発研究

小柳津 久美子

## 1. 研究の目的と背景

### (1) 研究の目的

本論文の目的は、キャリア教育において 2 年次こそが、大学と社会をつなぐ重要なステップに相当する準備段階であるという仮説にそって、2 年次対象のキャリア準備プログラムの開発、実施・検証を行い、その結果から、これからのキャリア準備プログラムのあり方について考察してみた。

### (2) GP から見たキャリア準備教育の取り組み状況

2004 年（平成 16 年）から始まった「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム」（以下 現代 GP）のテーマにキャリア教育の項目が設定されたのは 2006 年からである。

キャリア教育の先進的事例としてこれらプログラムの内容を分類してみた。その内容は実に多岐に亘っていた。本研究と最も近い位置にあると考えられる「総合的キャリア教育」の内容を見ても専門教育と社会をつなげたもの、システムとして教職員が分担して学内を挙げて取り組んでいるもの、女子学生が社会人になるためのものなどがある。

この「総合的キャリア教育」は 2006 年には全体の約 4 割を占めているが、翌年 2007 年には約 3 割と割合・件数とも減少している。また、「専門キャリア」も件数が減少している。この二つはプログラムデザインも非常に複雑であり、かつ短期間で成果が見えにくい。逆に課題がはっきりしておりそれゆえ成果も見えやすい「職業・就職」の増加が目立つ。

本来のあるべきキャリア教育、キャリア支援の方向と逆行している状況が見え、試行錯誤の段階であることが伺える。

## 2. 研究の方法

### (1) ブリッジになる 2 年次キャリア準備プログラムの開発

就職ガイダンスを行ってきた筆者は、「3 年になってからでは遅い。」と思うことが多くなった。ガイダンスでの学生の反応や、アンケート内容からその原因を考えると、①意識して生活していないので自分をよく理解できていない（特に長所）。②学力や知識・常識に関して自信が持てない。③大学生活を意識的に過ごしていない。

と言ったことが挙げられる。つまり、早い段階から将来を見据え、日々の生活を意識して過ごす中で、自分を理解し、自分のよいところに気付き、さらに成長するための道具である知識や情報を積極的に身につけていくことでどの道に進むかで迷うのではなく、進んだ道で頑張ることができるようになるのではないか。つまり社会とのブリッジ（架け橋）を作ればよいのだと考え、プログラムを開発した。

テーマは「Make Preparations for my career」とした。現在の学問との関わりを示しながら 2 年次の活動の蓄積がいかにその後の就職活動、社会活動につながっていくかをポイントにした。

プログラムは以下の 4 つのステップで構成した。自分を知り、社会や社会が求める人材を知り、自

分の将来を考え、計画を立てる。そして思考のプロセスや人に物を伝えることを学ぶ教材を用意した。座学中心ではなく、学生が取り組むワークや発表などを多く盛りむようにした。

#### キャリア準備プログラムの4つのステップ

STEP 1：現在の自分を知る (1～3回)

STEP 2：世の中で求められる人材、求められている力を知る (4～7、13回)

STEP 3：世の中の仕事を知る (8～12回)

STEP 4：具体的な行動計画を立案する (14回)

授業後は毎回アンケートをとることとした。内容は授業の理解度を確認、次回の導入、質問・感想などとし、アンケート結果は次回の授業の最初に紹介し、前回の振り返りを行うと共に何より大人数授業であっても学生とのインタラクティブな授業となるよう工夫した。

#### (2) キャリア準備プログラムの実施結果

実施結果は、毎回のアンケートからも卒業後の進路について考えるようになったり、社会の出来事に関心をもつようになったりした学生の割合が増えたこと、また最終レポートの内容から判断し

て学生が授業を受けたことによる「各自のキャリアに関する意識の変化」からも第2段階までが4割弱、第3段階まで3割以上の学生が到達しておりプログラムの目的に沿った一定の成果を出すことができたといえる。

#### キャリアに関する意識の変化

第4段階 今後について具体的な計画を立て実行に移している

第3段階 今後の課題、方向性が掴めた

第2段階 自己理解が進んだ。社会の状況が理解できた

第1段階 キャリアについてなんとなく分かった

### 3. 結論と今後の課題

本研究では、実施プログラムは全体としては9割を超える学生が授業に対し役立ったと感じ、自分の将来についても考えるようになった。キャリアに関する意識変容をもたらしたということでは一定の成果を挙げることができ、2年次に自分と社会をつなぐキャリア準備プログラムの実施が意味あるものであることを示すことができた。今後は、本来の1年～4年の連続したプログラムへの発展させていくことが筆者の今後の研究課題であると考えている。